

日華両語における外来語の表記法⁰⁾

鹿 島 英 一

キーワード 日本語 華語 外来語の表記法 カタカナ 華語の表音文字

要 旨 昨今、日本語へのカタカナの進出振りは留まるところを知らないかのようである。一方、日本語より一足先に国際化した(シンガポールの)華語にも外来語が氾濫している。中国語の比ではない。無論、既存の漢字を転用するわけである。日華両語ともただ置かれた環境に独自に反応しているだけである。だが、外来語の表記(処理)法を見る限り、よく似た現象にいろいろぶつかる。

本稿ではこの問題を取り上げ、日本語のカタカナと華語の表音文字の異同に関して二つほど論じた。一つは表音文字表の作成の試みであり、もう一つは表記のゆれ方の相違である。前者はカタカナの用字法との対照を基に、当地の実際の文字資料を使って行なった。また、後者では日本語の音のゆれと華語の文字のゆれが、表記体系の中で似た役割を果たしていることを指摘した。

一. はじめに

最近の日本文にはカタカナが目立つ。何もファッションやコンピュータの雑誌に限ったことではないから、使用語の多さだけが原因ではない。無論、そう感じる原因を明快に言い切ることは難しいが、読みにくさ、文中に占める場所の大きさ、(平仮名や漢字との)字形の違いと言ったことが関係していることは確かであろう。

一方、シンガポールの華語にも外来の語彙が氾濫している。時には、中国(普通話)文の仲間であることを疑ってみる気にさえなる。ただ、考えてみれば「天朝棄民」を合言葉に漢語の方言と幾許かの漢字の知識だけを持って、マレー語と英語の世界へ飛び込んで来た者とその子孫が大半なのだから当然ではある。そして、これは表記面にも当て嵌まり、書面語でもマレー語や英語からの外来語が目につく存在である。また、その要因も先に挙げた日本文の場合とほぼ同

じである。(以下、日本文はN、華文はHと略記する。)

ところで、Hの文字は漢字一種類である¹⁾。従って、基本的にはどれも意味を表す文字である。無論、時には(外来語の音訳語などで)表音用にも使うが、同じ音を表す字は沢山あるのが常で原則的にはどれを使っても構わないとされている(し、中国文などでは事実その傾向がかなり認められる)から、Nのカタカナに当たる文字(集合)はHには無いはずである。だが、華文の新聞を毎日眺めていると、カタカナと錯覚しかねない様な表記法やそこに使用される一群の文字に出会う²⁾。どうやら溢れる外来語を捌くために、Nのカタカナの役割をも押しつけられているらしい。本稿は日本語における外来語の用字法と比較しながら、これについて考えるものである。

二. 表記法の概要

始めに、外来語使用の背景を見てみよう。先ず、NもHも既に口語語彙に多量の外来語が入っており、その影響が次第に文語に及んできているという共通の事情がある。だが、歴史的な経緯の違いもあってか、外来語(特に、英語彙)に対する態度は些か異なる。(あくまでも比較の問題だが)使用動機はHの方がずっと实际的である。Hの方が事態は先まで進んでいるとも言える³⁾。(尚、以下では基本的に[]は文字とし、漢字は日本式の字体を使う。)

今度は、日華両語での外来語等に関する表記法の概要を見てみよう。最初は、現行のN(平仮名中心文)である。勿論、ここには最近の中国語等から借用した漢字語もあるが、カタカナがその任に当るのが常である。だが、カタカナは外来語の専用ではない。現行では次の様な場合も認められている。即ち、

- A. [片仮名/カタカナ][山羊/ヤギ][百合/ユリ]などの他、強調などの様に特別の意図を示す。
- B. 物音、動物の鳴声などの他、擬音語、擬態語、感動詞、呼び名、呼び声、片言、俗語、隠語などを表記する。

<表1> (A/Bの別は主に文字の用法による。)

要するに、「現代かなづかい」が適用された平仮名を所謂「五十音表」に照らして転写したのがAであり、そうでないのがBである⁴⁾。従って、Bで使う文

字には対応する平仮名がないこともあるが⁵⁾、読みと文字の対応は極めて明快で表音性が高い⁶⁾。

勿論、外来語を表記する文字はBに連なるわけだが、使える文字の範囲はずっと広い⁷⁾。この他、主に一般の外来語と地名などの固有名詞を分ける用字基準・原則もある⁸⁾。

今度は、Hの外来語の転写法を見てみよう。表2はその分類の概略である⁹⁾。

- | | |
|----------|---|
| (1) 意識法 | ① Lakeside：湖畔(地下鉄の駅名) |
| | ② Johor <u>baharu</u> ：新山(都市名) |
| (2) 形植法 | ① 刺身(日本食品名) |
| | ② 漢城(都市名：韓国) |
| (3) 音借法 | ① Melbourne：墨尔本(都市名) |
| | ② Kuala Lumpur：吉隆坡 ¹⁰⁾ (都市名) |
| | ③ 不明：(訳音)何明華(華人名) |
| (4) 転写法 | ① Addis Ababa：亜的斯亜貝巴(都市名) |
| (5) 折衷方式 | ① <u>New Zealand</u> ：新西蘭(旧)→紐西蘭(新) |
| | ② Texas <u>state</u> ：得克薩斯省 |
| | ③ Golf：高尔夫球 |

<表2>

尚、(5)①は近年は(3)で表記することを示す。また、例えば(3)[英格蘭](England)から作った[英国]の方は(5)③の一種としておく。

さて、この内(2)は要するに漢字語の流用で、無論Nにもある。数的にも多くない上、本稿の趣旨とは異なるので取り上げない。

次は(5)で、これはNの「重箱読み」や「湯桶読み」の範疇に属そう。より正確にはその中の①[西ヨーロッパ]、[外コーカサス]旧(→[ザカフカス]新)、②[テキサス州]に当る。尚、(5)③はNでは一般的ではない。[ゴルフ球]や[ゴルフ運動]は[golf]の翻訳法としては実用に適さないようである。

今度は(1)意識法である。Hの[春巻]をNで[はるまき]、英語で[spring roll]と言う類で極めて一般的な転写法である。NよりHの方が概して多い。同じ英語彙でもHでは(1)、Nでは(3)か(4)という例が少なくないのも一因である。

[second hand]→H[二手]、N[中古]/[セコハン]などもその中に入ろう。

最後は、(3)/(4)である。(漢字で表記する場合には、違いは必ずしも明瞭ではない。)近年、(1)から勢力範囲を奪い取る傾向があることはNと同じである。この内、(3)は使用者が実際の発音を正確に知っているのが通例で、日常生活に定着した外来語がこの条件に比較的合致する。一方、(4)は要するに綴字の移し替えて、含む意味や実際の音と無関係に使えて便利なため現今の固有名詞の翻訳では主要な表記方法になっている。

今度は、外来語以外のものを見てみよう。これには表1が役立つ。即ち、かたかなには二種類あるが、平仮名と機能的な違いが無いAの方はただ成り行きに任されているようにも見える。そのためか、漢字だけしかないHにはAの対応物は見当らない。

では、Bはどうだろうか。新聞には[トト](銃声)、[吼](ライオン)、[汪汪](犬)の例があったが、皆Nの[ダッダッ][ウォー][ワンワン]の意味にしか取れなかった¹¹⁾。

次に、擬音語、擬態語、感動詞を見てみよう。例えば、[ジャラジャラ](硬貨の音)や[ポトン](水中への落下音)や[パラパラ](雨の降る様子・音)を辞書で探すと¹²⁾[嘩唧]や[撲通]([撲通])や[嘩啦]が見つかる。また、感動詞[オイ/オーイ][アラッ/アラー]に当たる語も[喂][曖呀]といった具合である。一方、Nの擬態語に当たる語は[哩哩拉拉]([パラパラ][ボロボロ])の様な常用語もあるが、一般に擬音語よりは少ないと聞く。ただ、いずれにしる(物音や鳴声を含めて)、この種の語の文字にはある種の傾向が見てとれる。

最後は、表1Bの末尾にある俗語、隠語の類を見てみよう。無論、当地にも特有な語はある。例えば、[地牛](政府諸部門の取締官)や[大狗](警官)等がそうである。だが、特別な用字法というのは見当らない。

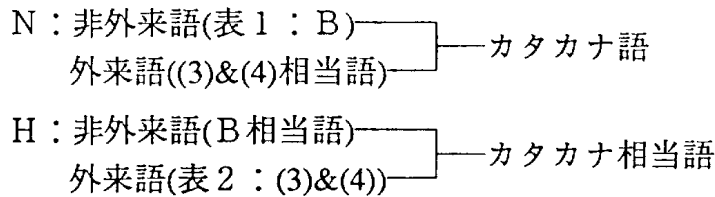
以上で、NとHでの外来語の用字法(表音文字)の分類も一通り終わったが、少し長かったのでここで要約しておこう。(以下では表1のAとBを、「片仮名」(=A)と「カタカナ」(=B+外来語)で書き分け、総称は「かたかな」とする。)

先ず、かたかなには二種類の用字法があった。その内、カタカナは表音性が高く、数も平仮名(と片仮名)よりかなり多い。また、カタカナ自体も実際には二種類あるようで、語彙の種類や定着度に依存して使い分けられるものとされている¹³⁾。尚、そのことは組合せ文字の表音性の弱さの観点からも(ある程度)

裏付けられる¹⁴⁾。

一方、Hにはこの種の規範や原則はない。だが、擬声語や感動詞など(カタカナ相当語)を表記する文字には萌芽が見える。[トト][吼][嘩啦]がそうである。ここ迄である。

この結果、次の様な関係が成り立つ。以後はこれに基づいて話を進めることにする。



三．華語文の表音文字

さて、準備も一通り終わったので、本論に入ろう。最初は、Hで(カタカナに似た役割をしている)表音文字の一覧表を作成する。ところで、Nでは外来語の表記に使う文字はBのカタカナに連なっていた。実はHでもそうなのである。これもカタカナを連想させる現象である。始めに、Hに特有な例を用いて表の作成方針を示す。ただし、(M)はマレー語、(E)は英語、共に直接の借入先を示す。

- 峇峇(M：baba：マレー人化した移住者男性)
- 巴士(E：bus：バス), 德士(E：taxi：タクシー)
- 馬打(M：mata：警察)
- 咖哩(E：curry：カレー)

<表3>¹⁵⁾

皆、外来語の表記に頻繁に使われる文字である。この内、[峇]は中国文では(通常[巴]に合併されて)使用は希だが、Hではまだ[巴]と併用している。[士]は華語音を反映してか(広東語風の)[ʃi]音用か(客家語や潮州語風の)[s]音用が普通である。一方、[馬][打][德]は本来の(表意)用法で使われるのが普通だが、単なる表音用にも頻繁に使われる。また、最終例の両文字はかなり特殊な部類に入る。例えば、辞書の[咖]の項には[curry]/[coffee]/[caffeine]の三例しかない上、(普通話では)/の前後で読みが異なる。極論すれば、[curry]と[coffee]の専用文字である。一方、[哩](旧来式の店では[咖哩]も見ると)の項には擬態語(が二例見えるが、Hで

は)[哩哩拉拉]のみに使うと言う。

結局、結論から言うとHの表音文字はほぼ次の三種類に大別できる。即ち、(表3の例なら)(a)[峇][咖][哩](専用), (b)[巴][士](準専用), (c)[打][馬][德](兼用)である。少し説明を補足しよう。先ず、(a)はカタカナにはほぼ相当する。(b)は表音文字として使われることが多い。一部には、普通の用法もあるが、実際には用字法の解釈を巡る混乱の恐れはまずない¹⁶⁾。一方、(c)は極く普通の漢字である。例えば[打]を辞書で見れば、大半の項目は表音用法ではない。従って、(何らかの理由はあろうが)たまたま(複数の同音字¹⁷⁾の中から選ばれて)表音文字としても使われているだけである。その際、(原則的には)字形はそのままでから、表意か表音かの用法の別が分かりにくい。多分そのためであろう、意符(部首:例[多] ⇔ [哆])がよく表音文字を示す印に転用される。時には、辞書に無い字(表4の*)も見かける。

今度は、いま示した方針に基づいて作った表音文字の一覧表を示す¹⁸⁾。(尚、()内は声調符号のない普通話拼音を示す。)

(a)&(b): 阿(a);奥(ao);峇,巴(ba);卜(bu);丹(dan);丁(ding);尔(er);菲/非(fei);哥(ge);哈(ha);卡(ka);克(ke);奎(kui);蘭(lan);魯(lu);芒(mang);孟(meng);欧(ou);喬(qiao);薩(sa);士(shi);斯(si);蘇(su);蚩(ya);耶(ye);伊(yi);[ㄉ] ¹⁹⁾ 哆,囉,喱,摩*,吧,嗎,哩,嗷*(gao),吓(pi),啤(pi),咖(ka),叻(le),吵*,咪,唸*,啞*,噎,吻*,啞*,哪,啦,叮;

(c): 安(an);白(bai);貝(bei);本(ben);比(bi);檳/賓(bin);波(bo);布(bu);參(can);查/渣(cha);打,達/撻(da);德(de);登(deng);地(di);多(duo);法(fa);盖(gai);高(gao);格(ge);古/固(gu);海(hai);黑(hei);華(hua);吉,基(ji);加(jia);金(jin);開(kai);康(kang);可/柯(ke);庫(ku);拉(la);萊/來(lai);廊/郎(lang);勞(lao);雷(lei);里/厘(li);列/烈(lie);林(lin);龍/籠(long);羅(luo);馬/瑪(ma);麥(mai);曼/漫(man);毛(mao);美(mei);米/迷(mi);摩/磨(mo);那/娜(na);南(nan);內(nei);尼(ni);寧/檸(ning);諾(nuo);帕(pa);派(pai);坡(po);普(pu);恰(qia);惹(re);日(ri);瑞(rui);賽(sai);三(san);桑(sang);色(se);沙/莎/紗(sha);山(shan);舍(she);聖(sheng);松(song);索(suo);塔(ta);台(tai);特(te);提(ti);土(tu);托(tuo);瓦(wa);維(wei);文(wen);窩(wo);烏(wu);西,錫(xi);夏(xia);先(xian);香(xiang);新(xin);修(xiu);須(xu);雅(ya);英(ying);優(you);沢(ze);扎(zha);

次は、主に外国の人地名に多用される漢字とそのローマ字表記(無明記は拼音)である。尚、方言音は表4より多い。

埃(ai);明(ben);勿,武(bu);大(da);迪(M/E: de);東(dong);都(du);佛(fo);夫(fu);甘(gan);
 戈(ge);公(gong);瓜(gua);亨(heng);禧(E: hill);胡(hu);芝,奇(M/E: ji);裕,朱/茱/株
 (M: ju);利(li);洛/落(M: lok, dok);盧(lu);倫(lun);密(mi);莫/模(mo);納(na);紐(niu);白
 (M: pa);班(M: pan);乃(M: rai);刹(M: sar);塞(se);雪(M/E: se);森(sen);申(shen);
 実(si);遜(E: -son);淡(tan);湯(tang);天(tian);旺(wang);翁(weng);沃(wo);兀(E:
 wood);夏(xia);辛(xin);興(xing);約(yo);

<表5>²¹⁾

以上がHの表音文字表の一例である。表4の文字が固有名詞にも使われるのは勿論だが、表5の文字でも時には一般の外来語に使われる。だが、それでも表音文字が二種類に大別されることは否定できない。用字法の別も実際にはNのカタカナの場合(第一表/第二表)と大差がない。また、既述の[]の文字はNの[ヴァ]行等の文字と同じく辞書には無いが、探せばこういう共通点も見つかる。

今度は、違いを見てみよう。勿論、その最たるものは(一音一字のNと違って)Hには同音の文字が複数あることだが、他で目に付くのはHの場合の表意性である。これは特に地名で目立つ。例えば、[新加坡]や[星嘉坡]は何やら好印象を振り撒くし、[埃及]や[徳黒蘭]はまた別の意図を感じさせる。この点が、[シンガポール]を[スィ...]に、[テヘラン]を[...ラーン]にして、新鮮さを出すのがせいぜいのNと違う。まして会社名ともなれば、[新奇士](Sunkist)や[益多](ヤクルト)の様に一層顕著となる。表音用法と言っても、同じ字形であるから当然である。従って、固有名詞の固定・管理には尽力が必要で、Hの地名表記は中国の表記<李, 銭1984>と高度に一致しているのは偶然とは思われない。

次に、同音名の表記法にも違いがある。例えば、異なる地名(Bali[巴厘]:Indonesia/Bari[巴里]:Italy)でも、Nでは同一表記(例:[バリ])となることがよくあるが、Hではまず無い。書き分けが容易だからである。無論、Nにも[ball](E)(→[ボール])との書き分けのために、原則を曲げて[bowl](E)を([ボール]でなく)[ボウル]とする様な工夫もあるが、この類いはあくまでも例外に属す。

四. 表記のゆれ

今度は、新しい外来語に付きものの表記のゆれを見ていこう。Nは表記する音がゆれ、Hは表記に使う文字がゆれると言えれば概要はほぼ表現できる。周知の様に、Nの主なゆれは外来語用の文字や長音符[ー]や促音符[ッ]の使用の有無である。ここでは、更に[ダリア/ヤ](dahlia)²²⁾や[ペルシア/ヤ](Persia)や[レ/リポート](report)等も加えたい。この内、/の後はHの[蘇丹](E:sultan)や[カラ優伎桑](日:からゆきさん)と同じ音訳法(3)に、また/の前はHの転写法(4)に当る。無論、この種のゆれはHにもある。例えば、ある日の新聞で、同じ[Texas state]に対し[得克薩斯](4)(外電の翻訳記事)と[徳薩斯](3)(社説)の両方を見た。表記の強く固定された地名ですらこうである。ただ、これは極端な部類に属す。一般には、Hの主たる特徴は使用文字の選択法にある。詳しく見てみよう。

例えば、Hでは[coffee](E)は[啖啖][啖啤][咖啡]、[otak](M)は[啖啖][烏打][O打]、[laksa](M)は[叻沙]²³⁾ [叻沙] [拉沙]の様に書く。皆、朝食や昼食の献立表に極めて普通に見られるものだが、表記には融通性がある。この種のものでは、字はあまり大事ではないのであろう。次のものはもう少し文字言語性が強い。同音語の書き分けのせいである。例えば、[salon](E)と[saron](M)は[沙龍][紗籠]と書く。官話音は声調も同じである。従って、(通常この順序だが)逆でも構わない。現に、外来語辞典には[紗籠]の項に[salon]も見える。この場合、糸偏の字だから[saron](スカートの類)を表すというのは規則ではない。表音文字化しているからである²⁴⁾。(表4と表5の/の前後の関係の典型例である。)

最後に、[香檳]や[蘇丹]を見てみよう。前者は[champagne]酒とスポーツの[champion]を、後者はマレーシアの王[sultan]とアフリカの国名[sudan]を意味する。二つとも日頃よく目にする表記だが対応は異なった。即ち、[champion]には[香檳]を避けて[冠軍](意識)を使うことが多いのに²⁵⁾、[蘇丹]には同文字語を解消する工夫が見られないのである。

なぜだろうか。まず、[sudan]を変えないのは(中国等との地名表記の統一の維持と)低い使用頻度のためだろうが、[sultan]はどうしてだろうか。表4をよく見ると、この両文字は共に(a)&(b)にあるからNのカタカナに近い上、一音一字にも近い。[sudan]の頻度を考慮すれば他の字に変える必要が特に無いのかもしれない。言い換えれば、表4と表5で試みた表音文字表の類に、H使用者が(臆気

ながら)現実性を感じている可能性があるのである。実際、それは実用文字の条件にも合っているように見える²⁶⁾。そして、(これは単なる推察に過ぎないが)Hの表音文字表にもし完成する日が来るとすれば、それは[倶楽部](E: club)が[克拉布]に、[阿彌陀](如来)が[阿米打]に変わった頃なのであろう。

五. おわりに

昨今、NもHも(音訳と文字転写を中心に)外来語の浸透が著しい。カタカナには現代の女文字的な要素があるとは言え、この傾向には更に拍車がかかる様子である。一方、現代漢文も普通話文や台湾・香港文から東南アジア一帯のHを経て、米州・欧州・太平洋に広がる華人・漢人のディアスポラの文字言語へと繋がり始めている。今、両者を見比べることは十分に意義があるように思う。本稿はその一例である。

<注>

0)「華語」は東南アジア地域一帯に分布する華人が(互いの母語が異なる際に)、家外での交際を使う官話(の一方言)を指して自ら呼ぶ名称である。英語ではMandarin (Chinese)と言う。本稿では、特にシンガポールのものを対象としている。尚、代表例として当地のものを取り上げたのは、華人が全人口の3/4を占める独立国家の公用語で、使用される表記法に政府の関与が認められるためである。また、所謂「母語」に相当する家庭内での言葉は大抵の場合、福建語、海南語、潮州語(以上:閩南語)、広東語(粵語)、客家語、英語の内の一つ(か二つ)である。尚、本稿は以下の文献に大きく依存するが、紙数の都合で(必要な場合を除き)一々明記しない。即ち、カタカナ表記は<武部1980>(分類)、<文化庁1974><内閣告示1991>(規範)、<金田一1979>(辞書)で、華語の外来語表記は<王1965>(分類)、<李1991><鹿島1993><劉, 高, 麦, 史1984><李, 錢1984>(用例)、<社会科学院1983><陳1972>(辞書)である。尚、方言音の吟味は<北京大学1989>によった。

- 1) 簡体字と繁体字をNの平仮名と片仮名の様に見做せば、マレーシアの(全国)華字紙は平仮名・片仮名混淆文の仲間とも言えようが、当地で見た記憶は無い。
- 2) 華文と普通話文の実際面での違いである。
- 3) 常用の口語語彙自体に外来起源のものがかなりあり、漢字による表記の案出は華文の生き残りの前提条件で、嗜好を反映した選択の範囲外にある。そのためか、Nでは既に主流の座から滑り落ちた「時装」(N: ファッション)や「電腦」(N: コンピュータ)という翻訳法(意訳)がHには今でも盛んに見ら

れる。Nでも(中等教育機関における英語の導入と戦後世代の絶対多数化により)やがてカタカナ語が常用語彙に広く浸透するように思う。

- 4) Aは[ゆり](花名)の様に書くこともよくあるが、Bは通常平仮名書きはしない。例えば電信の打電擬音は[とんつうとんつう]でなく、[トンツートンツー]である。
- 5) 長音を示す[ー](横書き)が代表例だが、(主に外来語用の)[スイ]や[ツァ]などもB用に使えばこの仲間に入る。次はAとBでの長音表記法に関する例である。

A : [ホウレンソウ/ほうれんそう/蒔蘿草] B : (E)[hall]→[ホニル], [sauce]→[ソニス]

- 6) 助詞[は][へ][を]や四つ仮名の書き分けやエ列・オ列の長音の表記に使う[い・う]などが無いからである。
- 7) 通常の五十音表以外に[ア/イ/ウ/エ/オ]が小さく添え書きされた文字が多数増える。また、[kw]行の[クァ][クイ][クェ][クォ]や[s]行の[スイ]や[l]行の[トゥ]などもこの仲間である。
- 8) 外来語の表記に関する国語審議会報告<昭和29年>や内閣告示<平成3年>に従えば、例えば[whisky]は[ウイスキー]、[Wien]は[ウイーン]のはずである。だが、[ウイスキー]の類の「精密表記」に出会う頻度は決して小さくない。尚、<平成3年>版の方が表現としては現状を追認するものになっている。(所謂「精密表記」は必ずしも発音通りを意味しない。)
- 9) <王1965>にはロシア語等の例が多いので、Hの例と入れ換えた。(3)③は正式な氏名が判明する前のニュースなどにおける華人名の暫定表記である。また、(5)③と(3)③以外での__は意味の対応を示す。尚、<王1965>では(5)は(1)に一括されていた。
- 10) <北京大学1989>で[吉]の声母を調べると、この例は南方方言音を写した様に見える。他にも類例は少なくない。従って、音声表記は主要方言音と華語音を全て挙げない限り意味をなさないから、以下でも省く。
- 11) 普通話での漢字音は、(前から順に)一応[bǔ][hǒu][wāng]となるが、この種の語に共通の「音や声調にあまり縛られない。」という特徴を備えている。例えば、[トト]は辞書には記載がないから[bo](軽声)でもいいだろうし、[吼]は[𠵼]の字形によくある音声用文字である。[汪汪]も(水の擬態語が)転用されたもので、(辞書にない)[旺旺]でもある程度通用する節がある。
- 12) これらはインフォーマントにも確認した。尚[嘆通]は広告で拾った例だが、あまり見ない表記である。
- 13) 具体的には、<告示1991>の第一表と第二表のほぼ二種類である。基本的には、第二表は精密な表記にのみ使われる。ところで、<文化庁1974>には、「慣用の熟している」地名等は一般(外来)語と同基準、原音の残感のある一般語は精密表記を採る旨の記載もある。だが、これが<告示1991>になると、文中から<一般(外来)語/地名等>と言う用語の区別が抜け落ち、原音や原綴りに近いか否かがほぼ唯一

の基準と変わっている。要は、現状を追認したのである。

- 14) <武部1980>にもある様に、片仮名[イ列]+[ヤ/ユ/ヨ]/[ア/イ/ウ/エ/オ]の読みは各々の文字からは理解できる。即ち、大文字が声母(語頭子音)で小文字が韻母(語中音+母音)である。そして、この規則が当て嵌まらない[イエ][ウイ][クア]等は皆<告示1991>の第二表にある上、第二表の文字(全て組合せ文字)は声母文字の取り方に統一性がない。例えば [kw],[gw],[s],[z],[ts],[dz],[f],[v] 行等ではウ段の文字を使うし、[t][d]行に至ってはエ段もオ段(例[テイ][トウ]等)も採っている。
- 15) これらの表記は<鹿島1993>から採った。
- 16) 例えば[士]は通常、(単独でなく)[士兵][士気]の様な少数の語の構成要素に使う。
- 17) 一般に、外来語は文字と声調(音)にずれがあるため声調は無視する。尚、<張1986>には広東語についての詳しい報告がある。
- 18) [菩薩][阿弥陀]などを代表例とする古い語は対象外とした。用字の種類が異なるのと表意文字化しているためである。
- 19) [𠄎]字形の内、意符[口]を表音文字の印に転化した文字は(調査の結果)三桁に上った。中には常用例が極めて少数の擬声語や化学物質名に限られている例も希ではないので、主なものだけを載せる。尚、音表記の無い文字は意符無し文字と同音である。
- 20) 例えば「打, 達/撻(da)」はこう読む。即ち、[打]と[達]は音では[da]で、[E: tart]→[達], [撻: ta]の様に[撻]を[達]の替わりに使うこともある。ただ、音訳語には官話音でないもの(地名には多い)もあるが、(量的には)Hの外来語の多くが普通話文と同じなので音を付した。また、普通話音が複数ある文字は代表的な方を挙げた。尚、その他の注意は以下の通りである。
- ① 根拠の弱いものや(使用の分散による)低頻度(%)の文字は表から外した。
 - ② (a)と(b)は技術的な原因等で一つにした。
 - ③ 基本的な資料は次の通りである。
 1. Singapore Street Directory (Ministry of Law:16th edition)
 2. 「南洋・星州 連合早報」(最近約一年分)
 3. 街中で集めた生資料
- 21) 例えば、マレー人名[mohammad]に[莫][末][黙]はよく出るが、高頻度の[莫]のみを採った。[摸特儿](E: model)の場合は意符のある方を使う。また、[克蘭芝](M: kranji)(地名)→[芝士](E: cheese)も同類である。尚、表4と表5の漢字が表す音節数は外来語辞典にある350余音節の約40%弱である。
- 22) 辞書には一応、両方とも載っている。
- 23) 各組とも前方からは古い順と見てよい。また、辞書には[沙]と同音字の[]は無い。<鹿島1993>で

触れた[吻](E: boar)の類の文字であろう。

24) 表音文字には、[籠]より(部首で意味を曖昧化した)[籠]の方がいいらしい。[奎籠](M: kelong: 魚捕りの海棚)も同じである。

25) たとえ、美人コンテストであっても、[冠重]という些か場違いの響きのある語を使う。次にNの場合を見ると、例えば[sauce](E), [source](E)は共に[ソース]となる。だが、書面語では意識([でどころ]等)と並んで長い語([情報ソース]等)も多用する。(話言葉ではまだ意識語が中心であろう。)

26) 表の文字は概ね次のどれかに当たっている。

- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| (1) 誰でも周知の簡単な字(*) (例: [山]) | (2) (縁起の)いい意味の字 (例: [聖]) |
| (3) 意味が明瞭でない字 (例: [峇]) | (4) 汎用(現行)例の乏しい字 (例: [欧]) |

(*)例えば、[Vesak Day](仏教徒の祝日)は[衛塞節]ではなく、簡体字[卫]で判断する。

参考文献

- 武部良明(1980)「日本語教育における片仮名の問題」『日本語教育』42号, pp.1-16.
- 文化庁編(1974)「改定現行国語表記の基準 一付 参考資料一」帝国地方行政学会, 東京.
- 内閣告示第2号「外来語の表記」(平成3.6.28)
- 金田一京助代表編(1979)「新明解国語辞典」(第二版). 三省堂, 東京.
- 鹿島英一(1993)「シンガポールの華語に見る外来語の表記」『中国語学』240号, pp.132-141.
- 王超尘(1965)「談翻譯人名地名的轉写法」(上)(中)(下), 『文字改革』1965年7, 8, 9月号.
- 中国社会科学院語言研究所編(1983)「現代漢語詞典」(第二版). 新華書店, 北京.
- 李永明(1991)「新加坡潮州話的外語借詞和特殊詞語」, 『方言』1991年1期, pp.56-63.
- 張日昇(1986)「香港廣州話英語音訳借詞的声調規律」, 『中国語文』1986年1期, pp.42-50.
- 李守貞, 錢端義編(1984)「日漢世界地名訳名詞典」新華書店, 北京.
- 劉正燾, 高名凱, 麥永乾, 史有為(1984)「漢語外来詞詞典」上海辭書出版社, 上海.
- 北京大学中国語言研教室編(1989)「漢語方音字滙」(第二版). 新華書店, 北京.
- 陳澧主編(1972)「日漢辭典」(縮刷版). 燎原書房, 東京.
- 譚伯慧(1981)「現代漢語方言」湖北省新華書店, 武漢.

<付記> 本稿を作成するにあたり、インフォーマントとして協力していただきました潮州語を母語とする南洋大学文学士、鍾秀脚さんに感謝いたします。